

平成 21 年 6 月 24 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19720080

研究課題名 (和文) 柳宗悦の植民地朝鮮における文化活動に関する研究

研究課題名 (英文) Cultural activities of Yanagi Muneyoshi at Korea in colonial period

研究代表者

梶谷 崇 (KAJIYA TAKASHI)

北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授

研究者番号：10405657

研究成果の概要：2007・08 年度の 2 年間にわたり、柳宗悦の朝鮮における活動およびその背景となった思想について、関連する人々（特に朝鮮人）と関連付けて、当時の新聞雑誌記事や回顧録・自伝的資料を日韓両国にわたって調査・収集・整理・分析を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	210,000	1,710,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学、文学論

キーワード：柳宗悦、柳兼子、日韓文化、廃墟派

1. 研究開始当初の背景

柳宗悦は大正期前半には白樺派の中心人物の 1 人として、西洋文化を日本へ紹介した人物であるが、1919 (大正 8) 年に朝鮮で起こった 3・1 独立運動を契機として、朝鮮文化へと関心の対象を移していった。柳の活動の特徴は、単に朝鮮文化を紹介するだけではなく、日本及び朝鮮社会の中で文化交流を実践したことにある。その活動は、講演会・朝鮮美術展覧会・声楽家であった妻の柳兼子の音楽会・西洋複製絵画の展覧会・李朝磁器の調査活動・朝鮮民族美術館の開館など、多岐にわたる。

またこれらの活動は、柳宗悦一人によってなされたものではない。柳兼子のもとより、他にも朝鮮に在住していた浅川伯教・巧兄弟、

もと信州白樺派で朝鮮に渡っていた赤羽王朗、日本への留学経験者であり柳に対する賛同者であった廉尚燮や南宮璧、関泰瑗などの朝鮮の青年知識人、およびキリスト教徒が柳と密接に関わっていた。

宗主国と植民地という引き裂かれた関係の中で、両国の人々が互いに交流しあい文化的な活動を行っていたという事実は注目すべきであり、調査・研究を通じてさらに明らかにされなければならない歴史的・文化的事象である。

近年の柳宗悦研究、特に以上のような植民地朝鮮との関わりに関する研究は、大きな転換を見せている。日韓の研究交流の活発化、及びインターネット等の情報技術の進歩・普及に伴い、これまで日韓双方でばらばらに進

められてきた柳研究は、ここ数年で急激に統合の方向へ進んでいると言える。研究論文等のデータベースが整備されることによって、日韓の柳に関する研究成果の共有が可能となった。

柳研究は、日韓共に1980年代末から90年代初めが最初の大きな転換期であったといえる。従来日本においては、《柳は帝国日本において良心的知識人でありえたか否か》という点に焦点化され、もっぱら日本の帝国主義との関係性の中で論じられてきた。1960年代の幼方直吉や70年代の鶴見俊輔、80年代の高崎宗司の研究が代表的なものである。

一方の韓国では「柳シンドローム」と呼ばれる柳宗悦に対する過度な拒絶反応が以前は強く存在していた。しかし韓国でもまた80年代後半頃より柳研究は転換し始めたという。韓国の柳宗悦研究者である李仁範は、「幸いにも1980年代以後発表された何編かの論文のおかげで柳の朝鮮芸術論はある時よりも再解釈の可能性に対する期待が高まった」(『조선 예술과 야나기 무네요시 (朝鮮芸術と柳宗悦)』、李仁範、シゴン社、1999年)と述べている。

1990年代以降、日韓ともに柳宗悦研究は文化的な側面に強く光を当てるようになった。趙善美らによって美術史的な側面からの柳の分析が行われはじめた。また柄谷行人、竹中均、朴裕河らによってオリエンタリズム批評の視点からも柳宗悦の文化的な政治性が指摘された。

本研究は柳の文化史的意義を考察対象としているという点で90年代の柳研究の延長線上にあるといえる。しかし90年代までの研究はもっぱら柳宗悦のテキストそのものを主な分析対象としていたのに対し、本研究は新聞・雑誌記事などを主な分析対象とする。柳の活動を同時代コンテキストの中に投げ込むことで、大正期の日本と朝鮮の文化史的な文脈のなかで柳を再評価できるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、1.において述べた研究の背景を前提として、柳宗悦を中心として1920年代に日本と朝鮮の間で活動を行っていた日韓双方の人々の活動に着目し、宗主国と植民地という非対称な関係の両国間でどのような文化的な交流が可能であったのか(あるいは不可能であったのか)という問題を、日韓双方に残された文献資料を基に明らかにすることである。

柳宗悦が遺した資料や柳の活動や人的交流に関連する資料はこれまでの柳宗悦研究の蓄積により、多くの歴史的事実や柳宗悦の思想的背景、文化的実践の実態が明らかにさ

れている。しかし、朝鮮人側の資料を参照することで、柳宗悦の思想と実践をより立体的にとらえることが可能になる。

同時に従来、柳宗悦近辺の人々―柳兼子、浅川兄弟などや朝鮮人知識人たちの思想や活動が、柳宗悦との関係性の中でのみとらえられがちであったことに対しても、別の観点を提示できる。すなわち、彼ら／彼女らなりの論理や思想を柳の思想・実践から相対化させるということである。

廉尚燮や南宮璧といった『東亜日報』や雑誌『廢墟』にかかわった朝鮮人青年知識人たちは確かに柳宗悦の強力な協力者であったことは確かであるが、彼らが柳の思想に共感し、柳の理想の実現のためだけに協力したという論理は、むしろ説得力を持ち得ない。朝鮮人として、自らのアイデンティティの危機に対峙しつつ彼らがなぜ柳宗悦と活動を共にしたのか、協力をしたのかという問題を、柳宗悦の視点からいったん離れ、彼らなりの論理の中で捉えかえすことが必要である。そうすることで柳宗悦という存在を、朝鮮近代史のなかで位置づけ、評価する。

3. 研究の方法

本研究はもっぱら資料調査・収集と収集した資料の分析・整理を主な方法とする。

調査対象は主に大正期に日本および朝鮮において刊行された新聞・雑誌資料、また当時の状況を理解するうえで有益と考えられる各種回顧録、自伝等の資料である。

調査を行う場所は、主に国立国会図書館および韓国の国立中央図書館とし、その他必要に応じて大学をはじめとする関連図書館に協力を仰いだ。

また韓国の資料収集および分析にあたっては海外研究協力者である韓国翰林大学校日本学研究所研究員・金希貞氏に協力を仰いだ。

主に調査の対象とした新聞雑誌資料は以下の通りである。

	日本で刊行されたもの	朝鮮で刊行されたもの
新聞	「朝日新聞」「読売新聞」「東京日日新聞」「信濃毎日新聞」「The Japan Advertiser」 「日本メソジスト新聞」などのキリスト教関連の新聞、など	「東亜日報」「朝鮮日報」「京城日報」「毎日申報」「大韓毎日申報」「時事新聞」など
雑誌	「改造」「太陽」「新潮」「芸術」「中央美術」「音楽」「音楽界」「白樺」「文化生活」「朝鮮」「朝鮮及び満州」「朝鮮彙報」など	「学之光」「新天地」「新生活」「我聲」「創造」「開闢」「廢墟」「白潮」「東明」「朝鮮文壇」「新女子」「女子界」など

また特定の人物に関する回顧録、自伝的資料の収集にも努めた。

主に対象とする人物は、朝鮮人としては「東亜日報」や「廢墟」に大きくかかわった廉尚燮、南宮璧、卞榮魯、閔泰瑗、羅蕙錫、呉相淳など、在東京朝鮮 YMCA の幹部であった白南薫や崔承萬などである。日本人では浅川伯教、浅川巧、赤羽王朗、柳兼子、あるいはキリスト教者である秋月致や丹羽清次郎などである。いずれも柳宗悦の活動に関わり、またそれぞれの活動を行っていた人物たちである。

4. 研究成果

(1) 文献資料調査

2007年度より2008年度にかけて継続的に上記3の研究方法に従い、関連する資料の調査、収集活動を行った。各年度1度ずつ（都合2度）ソウルおよび東京に出張し、研究代表者の所在する北海道においては閲覧することのできない資料を多数調査した。

得ることのできた資料は以下のとおりである。またそのうち主たる資料名も合わせて記す。（雑誌記事等は省略）

① 柳の朝鮮での活動を実質的に支えた東亜日報や廢墟派の人々、特に廉想渉、南宮璧、卞榮魯、閔泰瑗や呉相淳などの当時の状況を示す伝記的な資料

- ・閔泰瑗他著『青春礼讃』文公社、1982
- ・卞榮魯著『醜醜四十年-無類失態記-』1953
- ・金ガク〔サンズイに学〕東「草夢 南宮璧論」『韓国近代詩人研究〈第12輯〉』一潮閣、1974
- ・『羅蕙錫全集』テハク社、2000

② 留学生として日本国内で柳にかかわった白南薫、崔承萬などの自伝資料

- ・白南薫著『나의 一生』解愷白南薫先生紀念事業会、1968
- ・崔承萬著『나의 回顧録』仁荷大学出版部、1985

③ 当時の朝鮮人留学生たちの状況について書き残している金乙漢などによる資料

- ・金乙漢著『(実録) 東京留学生』探求堂、1986
- ・金乙漢著『金乙漢回顧録 人生雑記-어느 言論人の 証言-』一潮閣、1989
- ・李漢基著『迎瑞堂記』博英社、1986

④ 朝鮮人留学生に関する日本側の新聞・雑誌記事資料

⑤ 在日本朝鮮人留学生たちの学友会誌である『学之光』などの朝鮮側の雑誌記事資料

⑥ 柳宗悦の朝鮮における活動に関わった日本人に関する資料

- ・丹羽清次郎著『聖恩録(丹羽清次郎自伝)』、自費出版

(2) 調査・収集した資料の保存・整理

(1)において調査・収集した資料をデータ化して保存整理を行った。エクセルによる文献・資料リストの作成および、資料をpdfファイルで画像保存を行い、閲覧の便宜を図った。（ただし、すべての作業はまだ終了しておらず現在なお作業を継続している。）

(3) 資料の分析

以上の基礎的な作業を進めつつ、収集した資料の分析を行って本研究の目的である、1920年前後の柳宗悦および関連する人々（とりわけ朝鮮人青年知識人たち）の思想や活動の分析を行った。その結果、従来の研究においていまだ指摘されてこなかった実態についてのいくつかの見通しを得ることができた。

① 収集した資料は3・1運動後の朝鮮人青年知識人たちの文化や芸術に対する心理的状況やそれと社会や政治との葛藤をよく伝えている。特に留学生たちは2・8運動に当事者としてかかわっていたが、彼らは、日本に対する不信感や拒絶感が絶頂に達している中で柳宗悦という日本人を例外的に受け入れ、評価し、そして協力もしている。例外的な存在として他に吉野作造なども挙げ

られるが、柳と吉野の受け入れられ方には若干の違いがある。吉野は主に政治思想において朝鮮人たちから抛り所とされていた。(また金銭的な援助も惜みず、この点においても頼られていた)しかし、柳は朝鮮固有の文化の「真の理解者」「真の友人」として認識されており、金銭的な援助を行ってはいたが、それはむしろ日朝における募金活動の成果としてであった。柳は朝鮮の文化的アイデンティティを擁護する存在であった。いくなれば吉野は朝鮮人にとって「先生」であったが、柳は「友人」というべき存在であったということも可能であろう。20年代の日本人と朝鮮人の関係や、朝鮮人青年知識人層の複雑な心理的状況、および柳宗悦の活動の特異性を理解する上で、以上の点は重要である。

② 白南薰、崔承萬らが在日本朝鮮YMCAの幹部であったことも特徴的である。柳の活動が多岐の場合YMCAやキリスト教関係の施設で行われていたことを、あわせて考えるならば、従来の東亜日報や廢墟派との関係性に加えてYMCAとの関わりの重要性も見逃すことができない。また、柳宗悦が朝鮮において活動する際においてもYMCAは大きな役割を果たしているが、一方で在朝鮮の日本人キリスト者たち(丹羽清次郎、秋月致など)も柳と深い接点を持っている。また浅川巧もまたキリスト者であり、秋月との交流がある。YMCAおよびキリスト教者の活動についてはいくつかの資料を得ることができたが、十分とはいえず、これからの課題となる。

③ 柳と東亜日報・廢墟派との関係については従来多くの指摘があるが、今回彼らの自伝的資料を読み進めていくなれば、彼らの思想や行動が必ずしも柳宗悦のそれとは一致していなかったように思われる。

(4) 今後の課題

韓国の研究協力者の協力もあり予想以上に多くの資料(特に韓国の資料)を集めることができた。反面、資料の整理・読解・分析が遅れており、まだ若干作業を継続している。また研究成果を公にすることも遅れている。

現在韓国で共同編著者として準備中の論文集『야나기 무네요시 와 조선(柳宗悦と朝鮮)』(仮題)において、本研究課題の成果を発表する予定である。(論文(2件)は執筆投稿済み。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶谷 崇 (KAJIYA TAKASHI)

北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授

研究者番号：10405657